国語

1

次の文章を読み、あとの(1)〜(7)の問いに答えよ。

[1] かつて「必要は発明の母」と言われ[A]たが、今や「発明は必要の母」となっている。「必要」とは、より安全で、より便利で、より小型で、より省資源・省エネルギーで、より能率的で、というような人間が持つ欲望のことである。その欲望に突き動かされ[ア]てさまざまな新製品がテクノロジー(注1)によって開発され、人々の生活に利便をもたらしてきた。その意味では、[B]人間という知的好奇心を持つ動物特有の能力の一つがテクノロジーであることは確かである。これによって、人間は文化という他の動物には見られ[イ]ない新しい可能性を獲得した。「必要」という感性が、「発明」という知的能力を駆動してきたのだ。

[2] このように考えると、「発明は必要の母」となった現代においては、感性と知的能力の順序が逆転したことに気付く。テクノロジーという人間の知的能力が、人間の感性を支配し始めているのだ。それがいっそう徹底すれば、人間が自然から切り離され[ウ]、テクノロジーの中でしか生きている実感を持たなくなってしまうだろう。

[3] ある人類学者が述べているように、人類は、自然界に適応しながら生き残ってきた動物としての「ひと」の側面と、テクノロジーを始めとする文化の創造者としての「ヒト」の側面も持っている。この両面を調和させてきたが故に、五万年のホモ・サピエンスの歴史を紡(つむ)ぐことができたのだ。しかし、今、「ヒト」の側面が突出し過ぎて、「ひと」の側面が削(そ)がれ[エ]つつある。とはいえ、動物としての人間が持つ自然への適応性は欠かすことができない。自然の恵みによって食料を得ており、廃棄物は自然による処理に委(ゆだ)ねねばならない、という事実はテクノロジーの時代になっても変わらないからだ。そのことを自覚すれば、「ひと」と「ヒト」をいかに調和させるかが二十一世紀の大きな課題であることは間違いないだろう。

[4] そのための一つのヒントは、新しいテクノロジーとつきあうとき、これを使えば自分の中の何が失われていくかを考える癖を持つことではないだろうか。それも、長い時間スケールで見通す必要がある。ある能力がいったん失われてしまうと、その回復には長い時間がかかることは、リハビリ(注2)の訓練を思い出せばわかるだろう。つまり、[C]失われた「ひと」の能力は、「ヒト」が作り出したテクノロジーだけでは完全に代替できないのだ。

[5] 実は、テクノロジーの発展でもう一つ大事なものを失っている。時間である。便利になり能率的になったことによって、時間が増えるどころか、かえって忙しくなったのが実情[D]だろう。ケータイでのおしゃべりやパソコン技術の習得に時間が奪われているからだ。その結果、じっくりと考えたり、長い時間の先まで見通したりすることができなくなりつつある。

[6] ある経済評論家が用いている「決意せる消費者」という表現を、私は、「ある製品を購入するとき、何を評価ポイントにして選択するかを、はっきり決意している消費者」と解釈している。その評価ポイントは、環境共生とか、時間節約とか、自らの能力を喪失させないとかが挙げられるだろう。そして、それが満たされないとき、代替物で満足するのではなく、「買わないと決意」することが大事なのである。更に、この決意せる消費者に、「あえて手を出さないと決意する」ことも含めたいと思う。むろん、そんな個人の意識では社会は変わらないという意見はあるだろう。しかし、有限の資源と環境を考えれば、二十一世紀の一〇〇年間が同じペースで進むとはとても思えない。[E]いずれ、決意せる消費者に変わらねばならないときが必ずやってくるだろう。そのような消費者がどれだけふえているかが、日本の二十一世紀を占う指標になると思っている。

（池内了(いけうちさとる)「テクノロジーとのつきあい方」による）

（注1）テクノロジー＝科学技術。　（注2）リハビリ＝機能回復訓練。

(1) 文章中の れ[A] と意味・用法が**異なるもの**を、文章中の〜〜〜ア〜エのうちから一つ選び、その記号を書け。

(2) 文章中に [B]人間という知的好奇心を持つ動物 とあるが、この文章で表されている「人間」と「動物」の意味として最も適当なものを次のア〜エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 人間だけが知的好奇心を持っているので、もはや動物と呼ぶことは適切ではないということ。

イ 人間は知的好奇心を持つことによってのみ、動物ではなく人間であり続けられるということ。

ウ 人間が知的好奇心を持っていても、動物としての側面から離れることはできないということ。

エ 人間が持つ知的好奇心には、動物や自然を超えられるような大きな可能性があるということ。

(3) 文章中に [C]失われた「ひと」の能力は、「ヒト」が作り出したテクノロジーだ

けでは完全に代替できないのだ　とあるが、この内容として最も適当なものを次のア〜エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　動物である人間の暮らしている自然の一部が、人間の文化によって失われると、回復はし難いということ。

イ　動物の世界に戻ってしまった人間が、再び文化にあふれた世界で生きようとするのは困難だということ。

ウ　長い歴史によってつくられた文化を失った場合、動物としての人間はそれを再び得られないということ。

エ　動物としての人間のある能力がその文化によって失われた場合、取り戻すのは容易ではないということ。

(4)　文章中に　実情(D)　とあるが、ここでの「情」が表している意味として最も適当なものを次のア〜エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　本心　　イ　ありさま　　ウ　心の動き　　エ　社会の通念

(5)　文章中に　いずれ、決意せる消費者に変わらねばならないときが必ずやってくるだろう(E)　とあるが、筆者は時間の問題以外にどのようなことを恐れているのか。それをまとめた次の□に入るように、1・2段落のことばを用いて**二十字以上、二十五字以内**（句読点も字数に数える）で書け。

人間の知的能力が、人間の欲望を支配し過ぎた結果、□ようになること。

(6)　文章中には、次の□内の段落が抜けている。この段落はどこに入るか。最も適当なものをあとのア〜オのうちから一つ選び、その記号を書け。

右のように考えると、新しいテクノロジーの開発においても、個人レベルでのテクノロジーの利用においても、「あえて手を出さない」という発想は、二十一世紀の人類が獲得すべき英知と言えるだろう。

ア　1段落のあと　　イ　2段落のあと　　ウ　3段落のあと

エ　4段落のあと　　オ　5段落のあと

(7)　この文章で述べられている内容として最も適当なものを次のア〜エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア　環境や資源の限界を超えるような物作りが今後も続くと、二十一世紀には能力を喪失した消費者ばかりになるだろうと予測している。

イ　人間の発明という知的能力が、人間の感性を支配してしまうという事態がはじまっていることを警告している。

ウ　人間が自然への適応性から逃れられないのが自明であるように、環境を意識した商品こそが二十一世紀に生き残れると主張している。

エ　長年にわたる人間の知的活動の結果、二十一世紀には人間の力では制御できないようなテクノロジーを生み出すだろうと想像している。

2　内容理解・語句・文法

次の文章を読み、あとの(1)〜(8)の問いに答えよ。

志村(しむら)の家では(注1)火喰鳥(ひくいどり)を飼っていた。家の裏手に納屋(なや)があったが、階下を小屋にして、前の地面を網で囲んで、そこに入れてあった。

――(注2)欣蔵(きんぞう)が若いころにゃあ、ここの二階に寝起きしていただんて(注3)、後釜(あとがま)がミュー公になったわけだ、と志村の父親がいったことがあった。

ミュー公というのは火喰鳥のことだった。浩(ひろし)がいつ見に行っても、ミュー公は金網の上へ頸(くび)を出して、射るような視線を水平に走らせていた。彼が見上げると、時々見下ろしたが、表情を変えることはなかった。火喰鳥も、他の生物をおどしたり監視したりする運命を押しつけられていて、ここへ来ても、無為に神経を使っているようだった。檻(おり)からは、(注4)槙(まき)の垣根の隙間(すきま)に、低地を這(は)っている川と、その向こうのなだらかな山がきれぎれに見えるだけだった。それに、この鳥にかなうような犬もいなかったし、獲物を探す必要もなかった。

火喰鳥に石を投げると、眼(め)は宙を短く裁断するように動いて、石の動きを追い、地面からそれをくわえ上げて、のんだ。石が大きい場合には、垂直に伸ばした頸の中をそれが通過して行くのがわかった。浩はその都度後悔しながらも、□止め(A)が利かなくなって悪さを抑えることができず、石を投げ続けた。彼が感じたのは、鳥の胃に、一粒一粒罪を積んで行く、ということだった。〈ア〉

しかし、いつ行っても、鳥は浩の後悔をはらって、頸を上げ続けていた。こうして、鳥は時々のどの奥からあくびのようななきしる(注5)声を出すだけで、結局は無言だったし、宙に突き出たどぎつい形相も不変だった。

小雨が降っていた時にも、檻の中の土をこね返して、鉛色の空へまっすぐに濡(ぬ)れた頸を上げていた。そんなぐずついた天候が続いた後、初夏の晴れ上がった日曜日だった(B)。浩は火喰鳥に石をのませて、見守っていた。黒い羽は虹色(にじいろ)に輝いて、あらゆる光の宝庫を思わせた。その一端が鮮やかに色分けされて、顔をまぶたまで彩っているようだった(C)。浩の悪事――石はその体に収まってしまって、跡形もなかった。しかし、その時彼は、取り返しがつかない、と感じ、鳥を見守りながら、

――生き方が解(わか)らなくなってる、とつぶやいた。〈イ〉

彼は檻を離れ、精米工場に沿って歩いて、(注6)伊豆石(いずいし)の門の方へ行った。日曜日でも機械がまわっていた。(注7)羽目を片手で擦って歩いていると、屋内の音は融(と)け合って聞こえ

ていたが、明け放した入り口へさしかかると、(注8)調車（しらべぐるま）を叩（たた）くベルトの音、モーターの音、枝みたいに角のある杵（きね）の落ちる音などが、バラバラになってかぶって来た。出会いがしらに、浩は志村の父親とぶつかりそうになった。彼は、

——どうだミューは、浩さんの来るのを待ちかねているだろう。なあ、待ちかねている……、といった。〈ウ〉

いつも金網の上に頸を伸ばして、水平に眼を配っている火喰鳥のかっこうを、彼は、待っている、といったわけだ。[D]浩はあいまいに笑って、彼の眼を避けた。それから、彼の視野を意識して横切り、門から弾（はじ）かれるように街道へ出た。〈エ〉

浩は気持ちが萎（な）え、することが無くなってしまった気がした。行く手の眺めは余りに平板だった。火喰鳥の大きな体だけが、集約され、迫力を感じさせていた。浩は火喰鳥をもう少し見ていたかったが、門を出てしまってから、戻るのもおかしい気がした。

——志村のお父さんがいる。今日は休みじゃあないんか、と浩はつぶやいた。

彼は精米所に沿った路地へ入った。緑が融けた影から日なたへ出て行った。志村の父親の人のいい声がまだ耳の中にあった。浩は、僕はあの人もだましている、と思った。志村の父親は大きな、やせた人だった。はげ頭、洞窟（どうくつ）みたいな(注9)眼窩（がんか）、硬いこぶみたいなほお骨、その顔が粉にまみれて骸骨（がいこつ）に見えた。しかし、おうような人だった。粉にまぶされたような乾いた声の中に、優しい響きが感じられた。〈オ〉

川原からは、精米所の納屋が見え、少し眼を凝らしていると、若葉を透かして火喰鳥が見えて来た。浩は忘れていたことに気づいた。火喰鳥にとって今の住みかは、(注10)来世にいるよりも[E]□違いだ、ということだった。その頸は、平原でもたげていれば、広大な世界の毅然（きぜん）とした中心に——移動する中心になるはずだった。

——なぜ南から送ってよこしたのか、と浩はつぶやいた。〈カ〉

彼は川原の石を拾って、口へ含んでみた。石は雨を乾かしたばかりで、清潔だった。かすかに青空を映していた。それは浩の歯にぶつかり、痛みをともなって華奢（きゃしゃ）な顔の骨に内側から響いた。[F]彼には、自分の神経の網が弱々しく感じられた。それが歯にぶつかると、羽の虹色が宙にちらつくようだった。

（小川国夫「火喰鳥」による）

（注1）火喰鳥＝オーストラリアなどに住むヒクイドリ科の鳥。体長約一・五メートルで、ダチョウに似ているが小さく、よく走るが飛べない。
（注2）欣蔵＝志村家の次男で、ジャワ島などで百貨店を経営している。火喰鳥を送ってよこした。
（注3）していただんて＝していたので、の意。　（注4）槇＝ヒノキの美称。
（注5）きしる＝かたい物がこすれあって音が出ること。
（注6）伊豆石＝静岡県・神奈川県の海岸から産出する石。青黒く、庭石や建築に用いる。
（注7）羽目＝板張りの壁。　（注8）調車＝ベルトをかけて動力を伝える車。
（注9）眼窩＝眼球の入っている頭骨の穴。
（注10）来世＝死後の世界。あの世。

(1) 文章中の [A]□止め、[E]□違い の□にあてはまることばを、それぞれ**漢字一字**ずつで文章中から抜き出して書け。

(2) 文章中に [B]初夏の晴れ上がった日曜日だった とあるが、その季節の様子がよく表れている表現を文章中から**七字以内**で二つ探し、それぞれ**はじめ**の**四字**を抜き出して書け。

(3) 文章中に [C]その一端が鮮やかに色分けされて、顔をまぶたまで彩っているようだった とあるが、それを見たときの浩の気持ちとして最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 火喰鳥の美しさが自分の悪い行いに関係なく無事なのでほっとしている。
イ 火喰鳥の美しさにひきつけられ、自分のおろかさを思い知らされている。
ウ 火喰鳥が石を飲んでも美しいままであることに腹立たしさを感じている。
エ 火喰鳥のような輝きのある存在を目の前にして恐れと不安を抱いている。

(4) 文章中に [D]浩はあいまいに笑って、彼の眼を避けた とあるが、そのようにしたのはなぜか。文章中のことばを用いて、**十五字以上、二十字以内**（句読点も字数に数える）で書け。

(5) 文章中に [F]彼には、自分の神経の網が弱々しく感じられた とあるが、このときの浩の様子として最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 見知らぬ土地で孤独に生きている鳥に思いをめぐらすことで、周囲になじめないままに生きている自分を強く感じている様子。
イ 実際に自分で経験してみることで、美しい鳥を傷つけることしかできない自分を反省しながら、これまでのことを悔いている様子。
ウ 珍しい体験によって自分が中途半端な体や神経しか持たないことを知り、それを受け入れつつも明るく生きていこうとしている様子。
エ 美しい鳥ほどにも強くない自分の存在を感じて、その弱々しさを嘆きながら、やり場のない自分の気持ちをかみしめている様子。

(6) 文章中には、次の□内の一文が抜けている。この文はどこに入れるのが最も適当か。その場所を探し、直前の文の**終わり**の**五字**（句読点も字数に数える）を抜き出して書け。

すると浩の不安は薄れ、また石を投げたくなった。

(7) この文章全体を四つの場面に分けるとすると、第一・第二・第三の場面はそれぞれどこまでか。最も適当なものを次の**ア**～**オ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 第一…〜〈ア〉、第二…〜〈イ〉、第三…〜〈オ〉
イ 第一…〜〈イ〉、第二…〜〈ウ〉、第三…〜〈カ〉
ウ 第一…〜〈イ〉、第二…〜〈エ〉、第三…〜〈オ〉
エ 第一…〜〈ウ〉、第二…〜〈オ〉、第三…〜〈カ〉

(8) この文章の内容として最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 具体的なものの描写を極力省くことによって、抽象的な内容である筆者の観念を物語りに仕立てているので、難解な文章と言える。
イ あからさまな表現をあまり用いずに、落ち着いた描写に徹して人物の心の中の様子や行動を描いているので、知的な文章と言える。
ウ 人間の心が変化していく様子をダイナミックな展開で描いており、その移り変わりの壮大さや素晴らしさから感動的な文章と言える。
エ 登場する風景や人物の表情を大切にしながら、心情の変化にとらわれない客観的な情景描写に徹しており、叙情的な文章と言える。

古典 内容理解

3

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えよ。

ある山寺法師、学生(注1)にてはべりしが、世間のことは、をこがましく見えしが、賊人の坊(注2)へ入りたるを見つけて、追うほどに、園の柴垣の、犬の通ひ路より、くぐりて逃ぐるを、足をとらへて同宿の若き者を呼びて、「や、御房(注3)、賊人を捕らへたるが、法師はからむべきやう(注4)を知らぬに、隣の某房(注5)こそ知りたるらむ、おはしてからめてたまへ」といひやるに、いと騒がぬ気色にて、A行きて、「法師は、『Bちと申すべきこと候ふ。おはしませ』と申され候ふ」といふに、をりふし、非時(注6)食はんとしけるときにて、「C御分(注7)も食せ」とて、食してのち、楊枝使ふとき、「そもそも、何事に召され候ふにや」と問へば、「しかしか」といふを聞きて、「こはいかに。Dさらば、とくも仰せられで」とて、なぎなた取り持ちて、走り立ちて行きぬ。かの法師、出で向かひて、「せられて候ふを」といふに、あらあさまし。刃傷がと思ひて。さていかにと問へば、「足をとらへて候ひつるに、手を差し越して、腕をつみ(注8)候ひつるが、痛さに放ちて候ふ。さんざんにつまれて候ふなり」とEいひけり。

これはをこがましけれども、賊人をも刃傷殺害し、我も損じたらましかば、罪なるべし。なかなか罪なきことは、をこがましきところあるべし。

（無住「沙石集」による）

(注1) 学生＝学問を修めて学識を有する僧。　(注2) 坊＝僧の住まい。
(注3) 御房＝おまえ。　(注4) からむべきやう＝捕らえてしばる方法。
(注5) 隣の某房＝隣に住む坊主。　(注6) 非時＝正午を過ぎてとる食事。
(注7) 御分＝おまえ。　(注8) つみ＝指の先でつねり。

(1) 文章中には、カギカッコ（「　」）のついていない会話文が一つある。それを探し、**はじめと終わりの二字**を抜き出して書け。

(2) 文章中の A行きて、C問へば、Eいひけり の動作主として適当なものを次の**ア**～**オ**のうちから一つずつ選び、その記号を書け。

ア ある山寺法師　**イ** 賊人　**ウ** 同宿の若き者
エ 隣の某房　**オ** 筆者

(3) 文章中に B申すべきこと とあるが、それは何か。その内容として最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 賊人をつかまえたので、しばってほしいということ。
イ 賊人が入りこんだので、人を呼んでほしいということ。
ウ 賊人が逃げたので、いっしょに探してほしいということ。
エ 賊人につかまってしばられたので、助けてほしいということ。

(4) 文章中の Dさらば、とくも仰せられで は、「それなら、もっと早くそう言えばよいのに」という意味だが、なぜこのように言ったのか。その理由として最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 相手の遠慮に気づかず、自分だけ食事をとってしまったから。
イ 食事をしているうちに、若き者が伝えるべき内容を忘れていたから。
ウ 若き者が用をすませるのをあきらめて、食事をすることを選んだから。
エ 若き者は急いで用件を伝えるべきなのに、のんびり食事をしていたから。

(5) 筆者が「ある山寺法師」に対して抱いた感想として最も適当なものを次の**ア**～**エ**のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 賊人の言うことに従ったために、法師も罪を犯すこととなり、殺人という惨劇が起きたのだろう。
イ 賊人を傷つけなかったからこそ、法師に危害がおよぶこともなく、ただの愚かな笑い話で済んだのだ。
ウ 賊人のような罪深いものにも情けをかけてやったので、法師は極楽往生できるだろう。
エ 結果的に何も盗まれず、法師にもケガがなかったので、賊人のしたことは許してやればよいのだ。